

# 校長室より

暗唱だより

令和7年12月  
第三吾嬬小学校  
川中子登志雄



この秋、運動会、音楽会、児童集会、そして記念式典と  
「開校150周年記念行事」が目白押しでしたね。どの行事も、  
とても楽しく、心に残るものにすることができました。特に6  
年生は、全校児童の代表として、墨田区長さんもお見えになった  
記念式典に参加し、大変立派に代表の大役を果たすことができました。来てくださったた  
くさんの来ひんの皆様にもおほめの言葉をたくさんいただきました。「スーパー小学生」  
の皆さんを、たくさんの方々に見ていただくことができてよかったです。

吉田兼好(兼好法師)

とてもたのしい行事ではありましたが、10月からずっとあわただしく、つかれた人も少  
なくないでしょう。いつもの年より、この秋は校長室暗唱チャレンジにくる人が少なか  
ったです。令和7年の最後の月、12月は落ち着いた生活ができると思います。1年のふり  
かえりと、来年に向けての目標を考える時にできるといいですね。暗唱チャレンジも、  
ぜひ挑戦してください。

そこで、12月の暗唱課題は「枕草子（春はあけぼの…）」や「方丈記（ゆく川の流れ  
は絶えずして…）」とならんで、日本の古典3大隨筆の一つ「徒然草」の始まりの部分、  
「つれづれなるまに」に挑戦してみましょう。

## 「つれづれなるまに」 吉田兼好

南北朝時代に生きていた隨筆家・歌人です。そのころの日本は、地震やききん（雨が降ら  
ないことや、降りすぎて太陽が出ないことで作物が育たないこと）が多く、武士の戦が絶  
えないとても不安の強い時代でした。そんな時に、人里離れたところから、人々や時代の  
様子を、思いつくままに書き記したものが『徒然草』という作品になりました。この出だ  
しの「つれづれなるまに」の部分は、隨筆（エッセー）の文体の特徴を表しているこ  
とでも有名です。隨筆とは、ある題目をめぐって、したしみやすい言葉でおもむく  
ままに語るという形式で書かれた文章のことです。

「つれづれなるまに／日くらし、硯にむかひて／心にうつりゆくよしなし事を／そ  
こはかとなく書きつくれば／あやしうこそものぐるほしけれ」  
(やることもなく手もちぶさたに、一日中すずりに向かって、心にうかんではきえるとりと  
めもないことを、あてもなく書いていると、(思ったより熱中して)異常なほどくるおしい気  
もちになるものだ)

「兼好法師」とも呼  
ばれる吉田兼好は、  
鎌倉時代の終わりから